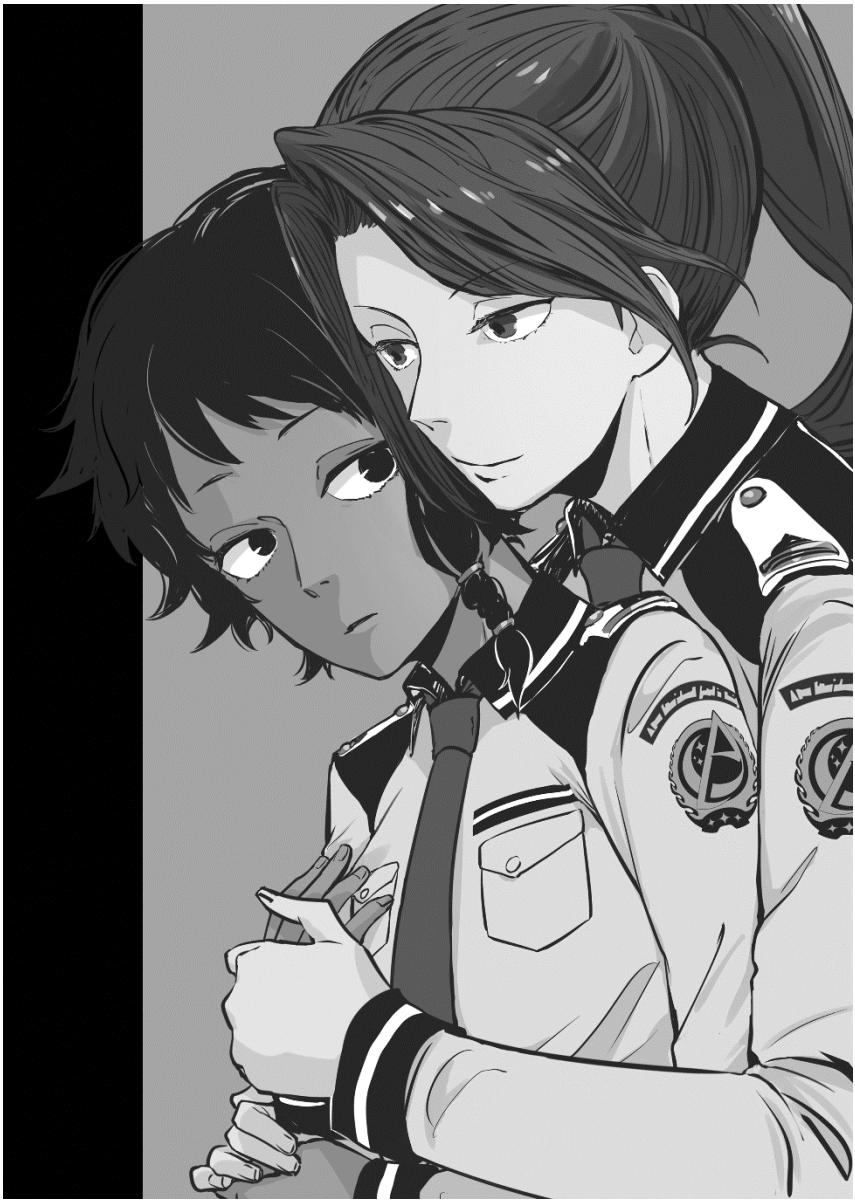
© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.



© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

『Secret Strategy』
～背徳の規律違反　あの子は教え子の部下……～

貴方は屈強なグルカ兵で、わたしは狡(ずる)い女――

「本日付けで、東京シャード AEGiS に配属されましたサンティ・ラナです」

ネパールシャードからやって来た褐色の少女は、勇猛で名高い歴戦のグルカ兵だった――

「はい、そうです。今日も鳳上官のお弁当を作ってきました」

そして彼女は、わたしの教え子の部下に――

「山野上官、こんどの新人教練の指導案ですが、ご確認いただけましたでしょうか？」
「ええ、とてもよく出来ていたわよ」
「ホントですか！　山野上官にそう言ってもらえると嬉しいです」
「本当にそう想ってる？」

ねぇ、サンティさん。数多の戦場で、幾度となく死地をみたでしょう貴方の瞳に、わたしはどんな風に映っているの――

「はい、ホントです。だって鳳上官いつも言ってますよ」
「加純が……」
「はい、鳳上官が山野上官はすごい人だと教えてくれました」
「そう……」

わたしは嫌な女だ。貴方を目の前にする度に、そう痛感させられてしまう。それなのに自分を止められない――

「でもね、サンティさん、大型ヴァイスの対処法だけど、このままでは駄目ね」
「えっ……、そこは鳳上官にご確認いただいたので

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

すが……」
「サンティさん、そもそもこれを加純に教えたのは、わたしよ」
「あっ、すみません。すぐに作り直します」
わたしは酷い女だ。褐色の手が動揺を隠せず、わずかに震えているのを目にしたら――
「ええ、明日までにお願いします。それと、また加純に相談するなら無理ね」
「えっ？」
「加純、今日からイングランドシャードに出張だから」
「あ、そうでしたね。どうしよう……」
ほら、また、すぐそんな顔をする。
貴方はいま、自分がどんな顔をしているのか、わかっているの――
「サンティさんって、綺麗な手をしているのね。意外と指も長くて」
「そうなんです。母（アマ）に似たみたいなんです」
わたしに触れられても平気なのね。
もし相手があの子だったら？　貴方はどんな反応をするの――
「知ってる？　指の長い人って慎重な性格だけど、その反面、情には脆いそうよ」
「そう言われますと、そういうところがあるかもしれないですね」
ここでのわたしは貴方の上官。模範となる様に規律を遵守しなければならない存在。なのにわたしは――
「サンティさん、指導案のことだけど、わたしがお手伝いしてもいいのよ」
「え、ホントですか？」
「ええ、貴方さえよければ」
「嬉しいです。やっぱり山野上官は頼りになります」

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

わたしは卑怯な女だ。そう促せば、下士の貴方はそう応えざるを得ない事を知っているのに。わたしたちは組織での生き方しか知らないのに――
「――上官、山野上官」
「あ、ごめんなさい。いつまでも手なんか握っちゃって。痛かったでしょう」
「そんなことはいいんです。ですから――」
〝そんなこと〟……そうよね、貴方にとってはそんな事でも、わたしにとってはこれが精一杯なの。だからお願い、そんな瞳でわたしを見ないで――
「もう山野上官、ホントにどうされたんですか？」
「い、いえ……べ、別に……」
「ずっと上の空じゃないですか。具合でも悪いんですか？」
「少し疲れたのかもね」
「大丈夫ですか？」
「ええ、問題ない――って、ちょ、ちょっと……」
「動かないでください」
火照ったわたしの体温を貴方の額が奪っていく。鼓動の音を悟られないようにしないといけないのに、貴方が心地よい冷静でいればいるほど、ずっとこうしていたくなって。
尚更わたしの体温は上昇し、鼓動が早くなってしまう――
「うーん、やっぱり熱があるみたいですよ、風邪ではありませんか？」
「ち、違うのよ。これは別に」
「ワタシ、心配です。山野上官にもしもの事があったら……」
だから、どうしてそんな顔をするの。そんな瞳で見つめられたらわたし――
「山野上官、とりあえず医務室へ行くのがいいですよ」
「え、ええ、そうね。ちょっと行ってくるわ」
「ワタシも一緒にいきます」
「だ、大丈夫よ、独りで行けますから」

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

いい年をしていながら、わたしは何をしているのだろう――

わたしは上官で、彼女は教え子の部下。それ以前にわたしたちは……。

「はぁ……」

誰もいない医務室、糊の効いたシーツがわたしの火照った体を落ち着かせていく。

覚めるなら早く覚めて欲しいと願いながら、夢の続きを欲しがる。

いけない事だと知りながら、自分で身を引くこともできず、貴方を目で追う日々を続ける。

世間体を気にするくせに、かといって諦めることもできず、胸の奥の埋み火を消せないまま。

そう想うえば想うほど、酷く自分が矮小なものになってしまったようで、尚更恥ずかしさがこみあげてくる。

懇願してまで、イングランドシャード行を代ってもらったというのに、結局、わたしは何もできないまま。

「サンティさん、来てくれないかしら……」

きっと優しい貴方の事だから、今頃はこんなわたしの心配をしている。

だからわたしは願ってしまう。小さな希望を捨てきれず、わたしを心配した貴方が、いまここに来てくれる事を。そして――

そんな想像を千回、万回繰り返したとしても、わたしと貴方がそうならない事もわかっている。わたしたちはAEGiSの職員なのだから。だけど、せめて、せめて、夢の中だけでもと――あぁ、今日もまたわたしは貴方を求め、火照りを繰り返してしまう――

「ダメですよ」

「わかってるわ……でもね、どうしようもないのよ……」

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

「何を言ってるんですか、ちゃんとお布団に入らないとダメですよ」
「えっ……サンティさん！　ど、どうして……」

「心配して来てみれば……〝薫子〟さん、手をみせてください」
「えっ？」
「いいから、早く」

おずおずと差し出した手を、貴方は強く握りしめた。それは、紛れもなく屈強なグルカ兵のもので、わたしは抗うこともできず――

「い、痛い、痛いわ、サンティさん、それに……」
「やっぱりです……」
「わ、わたしの手、そ、その……」

「薬指が人差し指よりも短い人は、仕事はできるのに、恋愛においては消極的なタイプが多いんだそうですよ」

「えっ？」
「ホント〝薫子〟さんは……」
「ごめんなさい、本当にわたしは……」

貴方は屈強なグルカ兵、わたしは……――

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

<後書きに代えて――お手に取って頂いた皆様へ、心から感謝を込めて――>

人は社会性に富んだ動物です。否応なしに、立場や地位によって己の振る舞いや発言が左右されてしまいます。

例えば、子が語りかければ親として、目上と会えば目下として、後人の前では先達として……。

でも、そんな立場が、時折どうしようもなく窮屈になる時はありませんか？

全てを捨てたいと願っても、理性がそれを抑え込む。けれども、抑えた分だけその想いは強く粘着質を帯びていく。

いつしか誰かがそこから助け出してくれたら、どんなに楽だろうかと願わずにはいられなくなって。

そんな時、相手が手を差し伸べてくれたら、その想いは永遠になるんじゃないかと、ちょっとだけズルいのだけれども、実際に起こったら何ものにも代え難い素敵な想い出になるはずだと、そう願いながら、このお話を考えてみました。

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

アリス・ギア・アイギス
alice gear aegis

チラ裏

2Dデザイナーによるウスイホン語り

※キャラ代理でお送りします

～Secret Strategy編～

社内で試し読みの時一番の歓声があがったかおサン

かおサンと見せかけてリバーシブルも提案してくれたタマちゃん流石っすねー生ついていきます
濃厚…

そこに加純さんもいれるタマちゃんの強欲さよ…
すき

表紙で制服着てるし背徳感があってたまらないです

表紙の絵はタマちゃんの絵柄のイメージに近い作家さんの作風を参考にさせていただきました。
いつもとテイストが違うので良い意味で同人誌感を出せたかなと。とにかく楽しかった……

山野教官呼びだったところから二人きりになったとこで薫子さんって名前呼びなんだから～
サンティそういうところよ

サンティがとにかく格好よくて…薫子さんのときめきが止まらない
ご飯三杯いける

サンティイケメン…年下×年上は万病に効く

タマちゃんと年下攻めについて熱く語り合いたい

ありがとうございました！

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.